30

『名家灸選』所収の隔物灸

鶴田　泰平
日本鍼灸研究会

『名家灸選』（文化十年［1813］刊）は江戸後期の医家・浅井惟亨（1760～1826）により著された灸法の専門書である．

『名家灸選』には続編として『続名家灸選』（平井庸信著．文化四年［1807］序刊），『名家灸選三編』（平井庸信著．文化十年［1813］序刊）があり，その体裁と構成は『名家灸選』に倣っている．

『名家灸選』の構成は上部病，中部病，下部病，緩治病，急需病，瘡瘍病，婦人病，小児病，雑症と末尾の附録敷灸（隔物灸）の10類からなる．この10類は40項目に分けられ，総数133法の灸法がその典拠や主治病症，取穴法とともに所収されている．

本邦の灸法は古来より様々なものが伝えられ，その簡便さから，専門家のみならず民間にも広く浸透し，その一部は現在にも伝えられ，行われている．それら灸法の多くは直接灸あるいは直灸と呼ばれ，皮膚表面に直接灸（艾炷）を置き燃焼させるが，それとは別に，間接灸と称され，皮膚表面と艾炷が直接接触しない灸法がある．その間接灸の中でも，皮膚表面と艾炷との間に特定の物体や材料を挟んで行うものを一般に隔物灸と称し，『名家灸選』の分類中では，末尾の「附録敷灸」に8法（全灸法中の6.0%）の隔物灸法が記載されている．また，これら8法の敷灸記載の前言として惟亨は「凡そ隔薬灸法は，薬熨の法，饅薬の法ともに相近く，効を奏すのも同様であるが，これらの法を用いる上で，（隔物灸法による）一時の快感・心地良さを求めるのみでは，病原を根治するには至らない．しかしながら，救急の一術として，私が試みて効あったものを挙げて，ここに示す．」と前提している．

このたびは，江戸後期における隔物灸の意義などを考察する手掛りを得ることを目的として，『名家灸選』の「附録敷灸」所収の灸法の主治症状，用いられる物体や材料，施灸方法，灸法の典拠などの調査を行った．

まず，「附録敷灸」の灸法の「見出し」と（典拠）は，①「隔蒜灸法」（試効），②「豉餅灸法」（『千金方』），③「隔附子灸法」（『千金翼方』），④「隔石蒜灸法」（試効），⑤「隔黒糖灸法」（典拠記載なし），⑥「隔旧薑茄灸法」（試効），⑦「隔炒塩灸法」（『救急易方』），⑧「隔薬豉灸法」（試効）である．このうち半数の4灸法の典拠が「試効」で，前記の惟亨の「付録敷灸の前言」での意向が反映されている．

各灸法の使用材料は，①蒜（ニンニク），②豉餅（香豉＝大豆を蒸して発酵させた味噌様のもの），③附子（トリカブトの塊根の子根），④石蒜根（彼岸花の鱗根），⑤黒砂糖，⑥旧薑茄（茄子の加工物．古漬けか），⑦炒塩，⑧薬豉（三年豉＝大豆の加工物か・胡椒・青苔・鯨魚の混合物）である．なお，①・④・⑤の3灸法は皮膚表面に厚紙を敷いてこれら材料を乗せること，他の5灸法は材料を直接皮膚表面にのせることが記されている．

各灸法の経文に表記される主治病症名は，①癰疽，発背，諸瘡癤，疔瘡，便毒，②発背，癰腫（已潰，未潰），③脳瘻，諸癤，諸癰腫，牢堅，④結毒疼痛，頭脳痛，項腫結核，牢堅，水腫，厥疝，腰臀腫痛，⑤骨槽風（已潰，未潰），項癰・瘻瘡（疼痛甚），⑥瘰癧（経年堅牢不潰），⑦霍乱腹痛，久泄瀉，疝気腹中急攣，⑧瘰癧，気腫，痔疾，瘻瘡である．

これらの調査結果より，病症状としては⑦以外はほぼ全て，できもの，腫物などの皮膚腫瘍によるものであること，隔物用の材料としては，⑦の炒塩以外は有機物であり，尚且つ植物系の材料が殆どを占めていること，③の附子，⑧の鯨肉以外は比較的身近にある材料であることが分かった．

このことより，江戸後期には，主に各種皮膚腫瘍の治療に隔物灸が多用されたこと，隔物灸を簡便に行うためにも，その材料は生活圏内で手短に入手できる物，またはそれらで代用可能であったことが推測される．